

今、大学入試で求められる力 その起源は「日常の問題解決」

あなたは「勉強」が好きですか？「Yes」の人はとても少ないかもしれません。単に教科書の内容を覚えて再現するだけの単調な学習は、「なぜ知識を得る必要があるのか」という本質を見えにくくしています。近年の学習指導要領で重視されているのが、「知識をどのぐらい持っているか」ではなく、「持っている知識を使って、何ができるか」という思考力・判断力・表現力の育成です。この力を育てるのによいとされているのが「アクティブ・ラーニング」をはじめとした、主体的で対話的な深い学びの手法です。文化学園長野中・高でなぜ「ジグソー法」を用いた授業を行っているのかも、考えてみたいと思います。



無着先生と山びこ学校の子どもたち

だれもが等しく学べる場所 — 地域・世界がでっかい教室だ！

昭和20年代、「山びこ学校」での問題解決学習

戦後間もない頃、山形県の貧しく小さな山村の中学校に、師範学校を出たばかりの無着成恭（むちゃくせいきょう）という先生がやってきました。

無着先生は「生活綴方（今の生活ノートの様なもの）」を通して、子ども達が日々の生活の中で起こったことや、それについての疑問や意見を表現する「作文実践」を試みていました。



ある時、中学2年の江口君のお母さんが心臓の病気になります。葉タバコ農家の彼の家は、この村の中で最も貧しい層であり、扶助（生活保護）を受けていました。一家は働いても働いても豊かになりません。お母さんもお金のことを気にしてなかなか医者へ診てもらえず、結局死んでしまったのです。江口君は、お母さんのことを次のように「生活綴り方」に書きました。

…（略）… 今考えてみると、お母さんは心の底から笑ったときというのは一回もなかったのではないかと思います。お母さんは、ほかの人と話をしている、なかなか笑わなかったのですが、笑ったとしても、それは「泣くかわりに笑ったのだ。」というような気が今になってします。それが、この死ぬまぎわの笑顔は、今までの笑顔と違うような気がして頭にこびりついているのです。

ほんとうに心の底から笑ったことのない人、心の底から笑うことを知らなかった人、それは僕のお母さんです。

僕のお母さんは、お父さんが生きていたときも、お父さんが死んでからも、一日として「今日よりは明日、今年よりは来年、」とのぞみをかけて「すこしでもよくなる、」と努力して来たのでしょ。その上「他人様からやっかいになる」ことを嫌いだっただお母さんは、最初村で扶助してくれるというのもしかないで働いたんだそうです。それでも借金がだんだんたまってゆくばかりでした。…（略）…

（江口江一「母の死とその後」）

やがて、この作文がクラスで共有され、「なぜ自分たちは貧しいのか」「どうしたら貧しさから抜け出せるのか」を議論していきます。教科書の記述と自分たちの生活のギャップを疑問視して、ついに子どもたち自身の探究学習だけで資本主義の本質的な問題へとたどり着きます。

この「生活綴り方」は、のちに『山びこ学校』というタイトルで出版され、ベストセラーになりました。単なる作文集とは異なり、直面する具体的な暮らしの問題を取り上げ、ともに考え、解決しようという探求の姿勢が隠されることなく描かれています。この綴り方による実践は、当時の苦しい農村の現実という問題を解決する実際の行動へとつながっていきました。現在の教育で目指している「主体的・対話的で深い学び」の原点は、山びこ学校の様な「問題解決学習」にあります。



「山びこ学校」は、古くて新しい教育だった

昭和30年代～40年代初頭、日本は戦後の復興から高度経済成長の時代に入ります。国際社会での日本の存在をアピールしていくために「同じ規格の製品を素早くたくさん生産できること」が価値のあることだと認識され始め、人間の価値にも影響を与えました。「たくさんの知識を持ち、様々なことが正確に素早くできる人」が優れた人材であるとされ、その能力を育てるための教育システムも生まれます。点数化される分かりやすい指標で個人の力を測るようになると、一律のテストによる点数を重んじた大学入試が行われるようになります。

ここで問題なのは、受験に特化した塾で学べる生徒が入試では有利なため「親が裕福であれば、ある程度の学歴を持てる」ことです。高学歴であれば比較的安定した職業に就くことができるので、その子どもも十分な教育が受けられます。これを「教育格差の再生産」と言い、知識量を測るような学歴社会の最大の欠点と言えます。この教育評価のもとでは、学習塾などのない地方の山村の子どもの大学進学を特に難しくします。これを都鄙格差（とひかくさ：都市部と地方の差）といいます。山びこ学校の様な学び方は廃れ、学力格差が広がってきました。

では、山びこ学校の様な学びは、現代では全く意味を持たないのでしょうか？近年、大学入試の選抜方法も多様になってきています。単にテストの点だけではなく、これまでに何を学んできたか、これから何をしたいのかを、論理的に説明できることが求められます。そのプロセスを通して測られるのが、この「問題解決力」です。

最近、「問題解決学習」を授業で行う小・中・高校がどんどん増加し、地域の資源を生かした特色あるカリキュラムが注目されています。実際に身の回りにある課題を発見し、異なる価値観を持った他者と協力し解決しようとする、本気で考える必要が出てきます。この「本気」が、学びを楽しくする根源にあります。これが「主体的・対話的で深い学び」です。

山びこ学校の「本気の学び」は、生徒たちに本物の力をつけたのです。

多様化する大学入試 — これらの意図は何なのか？

根底に貧しさがある山びこ学校の子ども達が何を学んでいたのかというと、一つは「社会のしくみを解き明かし、そこに自分がどう関わるか、社会の中でどう生きるべきか」という切実な課題でした。こうした態度を、シティズンシップ（市民性）と言います。私たちは、少なからず社会とつながりながら生きています。一人一人の市民の責任として、現代の複雑で多様なグローバル社会を、他者と共に生きながらどう良くすることができるのか、現状で最もふさわしい答え（＝最適解）を出すことが求められています。つまり、大学や社会が求めている人は、「シティズンシップに基づいて最適解を出し、新しい何かを創造することができる人」です。

「新しい何か」を想像するには、それなりに知識やスキルも必要です。特に、社会の発展を考えるなら、統計学・語学（日本語・英語など）は欠かせません。高度なスキルを習得するための基礎学力を教科学習でつけ、それらを統合的に使用して初めて自分の頭で考えることが可能になり、「新しい何か」を作り出すことができるのです。また、多様な他者の意見に耳を傾けることで、一つではない問題の解決方法（＝最適解）に厚みを持たせることができます。「身近な問題を考える」「他者と協同する」「様々な知識を結び付ける」は、全てESD（持続可能な開発のための教育）で重視される学び方です。（下図参照）

「対話」で深まる学び — 知識構成型ジグソー法とICT教育と「最適解」

9月2日、ジグソー法の研究授業（中学1年・国語）がありました

文化学園長野中・高がアクティブ・ラーニング手法の中心に置いているのが「知識構成型ジグソー法」です。この日は、この手法の考案者でもある東京大学CoREFの白水始先生をお迎えし、研究授業と教員研修が行われました。（授業者：中村祐貴先生）

仮説を立てて検証・考察をする文章の書き方の基礎を学ぶ単元の中で、実際の問題である「新型コロナウイルス感染拡大」を扱いました。感染者に対する誹謗中傷等についての新聞記事等を参照しながら「誹謗中傷や差別をなくすために、何ができるか（＝最適解を探す）」考察を深めていく内容です。3つのエキスパート活動で別々の資料を読み込んだメンバーがジグソー活動で情報共有し、意見を交わしていきます。

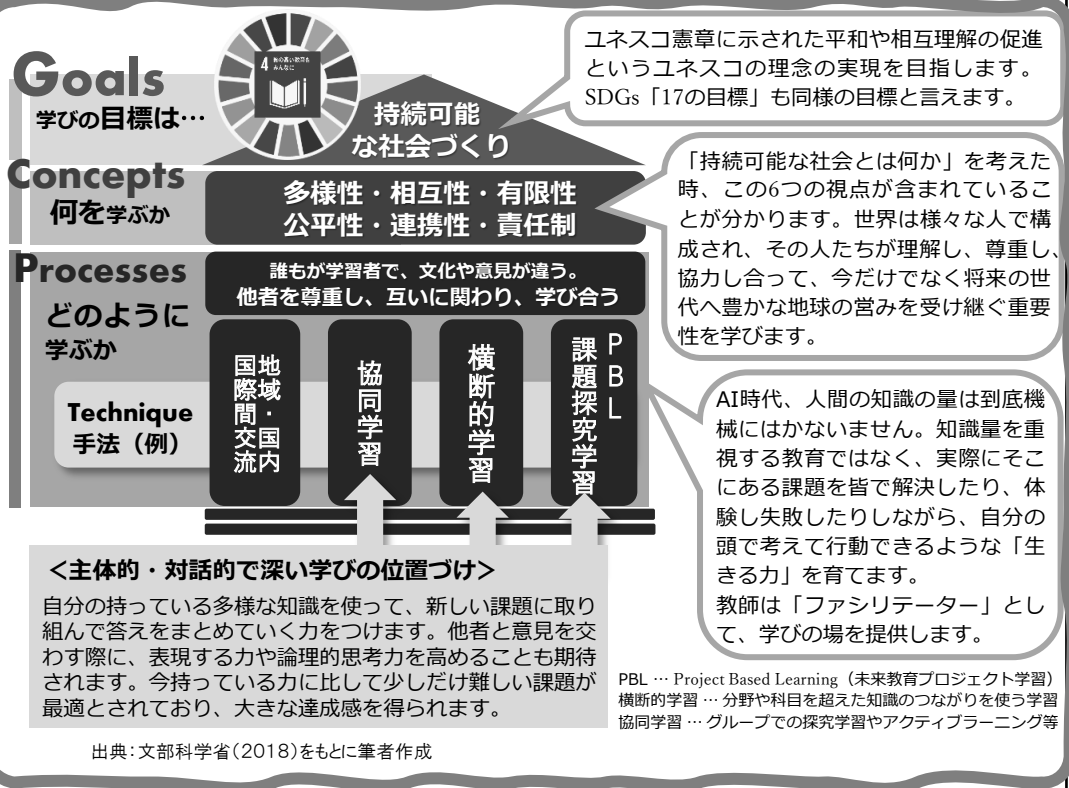


また、グループ対話や個人での省察を行う際に、ICT機器を用いました。将来を見通し、ツールをどう活用するかにも注目が集まりました。今年、リアルとオンラインが融合したハイブリッド型授業の可能性も高まりました。このスキルを身に着けることも非常に大切な活動です。「できること」を増やして、定着するの、アクティブラーニングの目的です。



別室で先生が指示出し

全人類が直面しているウイルスとの闘いについて、「重症化をしないから大丈夫」とか「自分だけは大丈夫」ではなく、当事者意識を高めて向き合い、次の授業でレポートにまとめます。自分が伝えたい内容を他者に理解してもらえように「伝える力」をつけようとしています。



<参考・引用>
無着成恭(1951)『山びこ学校』青銅社
志水宏吉(2010)『学校にできること — 一人称の教育社会学』、角川選書480、角川学芸出版
東京大学CoREF (https://coref.u-tokyo.ac.jp/)

ワールド・フェスタ IN長野に参加して (中学)

9/12 (土)、長野市セントラルスクエアにおいて、「ワールドフェスタ IN長野 2020」が開催され、中央通りには久々の活気が戻りました。例年、11月に屋内で開催されていた同イベントですが、昨年は台風19号被害で中止。今年はコロナウィルス感染拡大防止に努めながらの屋外での開催です。セントラルスクエアのオープン記念イベントとして、県内外のニュース番組でも広く報道され、1,220人の来場があったそうです(長野市調べ)。文化学園長野中学は全校で参加し、前号にて紹介した「新聞エコバッグ」を配布したり、新聞エコバッグ制作体験ブースを運営したりしました。地域連携に根付いた、体験的学びの機会になりました。

Welcome!
加藤市長



ブースには、二百名以上の来場があり、にぎわいました。感染対策でビニールシートが設置され、安心して開催できました。長野市役所の皆様の創意工夫に感謝です。



夏休み明けから、中学全校で約300枚のエコバッグを作り、その目的などを書いたチラシと共に来場者へ配布しました。



小さなお子様からご年配の方まで、楽しんで体験していただくことができました。

準備した取っ手のひもが足りなくなり、急遽ブース内で新聞紙を使った取っ手づくりをしました。予想外の出来事に対応することも学びました。



新聞等をご提供くださった皆様、誠にありがとうございました！

この場をお借りして、御礼申し上げます。

長野市国際交流コーナー 様
長野市インバウンド国際室 様
長野市日中友好協会 様
横澤 様
長野県国際化協会 (ANPI) 様
国際協力機構 (JICA) 様



多様な皆さんとの交流ができ、生きた学びを得ることができました。

生徒の感想

暑い中、本当に頑張ってできたと思いました!! 私は接客が課題点でした。人に教えるのはすごく難しく、普段から小さい子との関りが無い分、より大変でした。でも、子ども達がみんな嬉しそうにエコバッグを見つめているのを見て、教えてよかったと思います。次回もあれば、今年以上に頑張りたいです!! (中2)



ワールド・フェスタに参加して、地域の住民の方々にSDGsについて知ってもらったことが、とてもよかったと思います。また、先輩たちと仲良くなったというのも、とてもよかったと思いました。(中1)



私は最初、面倒くさかったけど、体験コーナーで自分が一番最初の子に教えてからすごく楽しくなった。配る時は、私は中1の子たちと一緒に色々な世代の方たちに積極的に声をかけて、すごくたくさん配れて、なんか今までのワールドフェスタの中で一番得した気持ちになった。最高のワールドフェスタでした。(中3)



今回、友達と一緒に、積極的に来場者へ声をかけてエコバッグを配ることができた。グループで相談して決めた心がけ「挨拶、笑顔、声を大きくはっきり」をしっかりと実践できた。ただ、配布中、受け取ってくれなかった人がいた。「どうせ捨てるでしょ?それってエコなの?」と言って去った人がいた。そのような言葉に、どう受け答えしたらよいか考える必要があると感じた。(中3)



新聞エコバッグの配布で、優しく接してくださった方もいれば、無視をする方もいました。その時は結構メンタルにきました。優しく接してくださった方にはとても嬉しく、「作ってよかったな～」と思いました。短い時間の中で、たくさんの方にエコバッグを渡しましたが、今後も使ってもらえるといいなと思います。(中2)



初対面の人、自分と世代や国の違う人たちにどう接するか、相手が何を考えているのかを推測しながら、丁寧に対応している姿が数多く見られました。人と関わっていくことで、有用感(役に立っているという実感)が高まって、楽しくなりますね。協働(ともに活動すること)で仲間との絆も生まれ、学校生活の充実にも繋がっていきます。

興味関心の薄い人に理解してもらうのは、至難の業です。レジ袋と新聞エコバッグの環境負荷の差を論理的に話せるようになったら、相手を納得させられるのではないのでしょうか。普段から、「なぜ、どうして」の根拠をもって意見を述べるよう心掛けてみましょう!

Scoop! インタビュー

高校生・大学生がプロデュースするゲストハウスがまもなくオープン!
グローバルな発想で 異文化交流の場づくり
本校 高校3年生 小山さん、田中さんが参加



長野市で、観光・交流・DIY (Do It Yourself) : 日曜大工のような簡単な大工仕事)等に興味のある高校生・大学生が組織する「未来を切り開け信州」というプロジェクトが、長野市南千歳町にゲストハウス&シェアハウスを文字通り「作って」います! 合同会社水本エンターテインメント(所在地: 長野県長野市)の発案で、若者の視点を盛り込んだリノベーションを施し、11月にオープン予定です。

JTBが行った「新型コロナウイルス感染症の流行が旅行市場におよぼした影響」の調査では、「約7割が国内旅行は前向き、約4割が海外旅行は控える傾向」という結果を得ました。今回のプロジェクトでは、「1部屋貸し切りの密にならない旅行」をコンセプトに、長野への国内観光需要を目指して、新しい仕掛けに挑んでいます。

また、このゲストハウス&シェアハウスは異文化交流も視野に入れ、長野の若者のグローバル化にも貢献しようとしています。

「未来を切り開け信州」の共同代表を務める小山瑞貴さん(本校高3生)と、同プロジェクトメンバーの田中彩乃(本校高3生)さんから、参加の動機や目標をお聞きしました。



「未来を切り開け信州」のプロジェクトメンバー



文化学園長野高等学校3年 小山 瑞貴

私はボランティア活動で七二会へ行き、過疎化している町の実態を知りました。そんな長野県にどうしたら人を集客できるのか学びを深めたくてプロジェクトに参加しました。将来長野県に就職を考えているので、生まれ育った長野の発展に少しでも寄与できればと考えています!

文化学園長野高等学校3年 田中 彩乃

もともと何かを計画・実行することに興味がありました。しかし、実際にこのような大きなプロジェクトは初めてで、ぜひ挑戦してみたいと思い参加させていただきました。また、自分自身のハンガリー留学経験を生かして、この企画に積極的に参加することで、グローバルな実践ができたと思っています。



BGNユネスコニュース
あなたの隠れた活躍を
教えてください!

学校外で面白いことをしている人、他校や社会人団体の人たちとSDGsに関わる活動をしている人など、本校の隠れた逸材を探しています! 取材の上、本誌に掲載させていただきます。自薦・他薦は問いません。年中募集中ですので、これからの活動も大歓迎です!

★中学職員室 BGN編集担当(長田・榎本)まで教えに来てください!